

いま『夜明け前』を読む

今なお、世はまだ夜明け前のままである。しかしまた、近代日本を痛恨をもって繰り返るわれわれは、『夜明け前』に導かれて、新しい世界の、その扉を開け得る位置に立っている。

はじめに

島崎藤村晩年の作品『夜明け前』は、未解決の問題に正
面から立ち向かった歴史小説である。主人公の青山半蔵は
藤村の実父を原型とする。藤村が『夜明け前』で追求した
問題はすべて今日に開かれた問題である。

本稿は、『夜明け前』を読む」として二〇〇四年に制作
し、青空学園日本語科においていたものに、それからの十
二年の世の変転をふまえて加筆したものである。

この十二年間の変転をふり返るなら、まず二〇〇八年、
世界的な経済危機が起こった。これは、拡大を旨とする資
本主義が、地球の有限性のゆえにもはや拡大し得ず、歴史
が次の段階を求めているという事実を教えている。

そして、二〇一一年三月一日、東京電力福島第一原子
力発電所の核惨事が起こり、今日に続いている。これは、
明治維新にはじまる近代日本の問題が集中した人災そのも
のであった。

さらに、二〇一五年、西洋世界の難民問題が表に現れ

た。これは、八百年におよぶ西洋の非西洋に対する収奪の
結果として社会的な基盤が崩れた地域からの、生きるため
の大移動であり、かつてのゲルマン民族大移動と同様、旧
世界を大きく揺り動かしている。

世界はいま大きな転換期にある。歴史の現在から、もう
いちど島崎藤村の『夜明け前』を読みなおす。

第一章 『夜明け前』の時代

木曾の馬籠

物語は「木曾路はすべて山の中である」との一文ではじ
まる。青山半蔵は、木曾の馬籠で本陣、問屋、庄屋を代々
の家業とする家に生まれ、その家業を継ぐ。半蔵は、本居
宣長、平田篤胤を敬い、篤胤の弟子として明治維新に王政
復古の夢を託した。

だが明治維新は半蔵が夢見たものではなかった。維新
の現実に絶望した半蔵はついに狂い、座敷牢に生涯を終
える。

徳川時代は交通手段も身分制度の下にあり、宿場街の宿は階層により異なっていた。本陣は武士のための宿であり、また彼らのために輸送手段を整える役割も果たし、幕藩体制の根幹をなす交通産業そのものであった。本陣、問屋、庄屋を兼ねるということは、徳川幕府の地域支配の根幹を担うことを意味した。

徳川時代に幾年も幾年もくりかえされてきた宿場町の営みが、黒船を契機にして大きく動いていく。嘉永六年（一八五三）六月、黒船など四隻が来航する。江戸では「太平の眠りを覚ます上喜撰、たつた四杯で夜も眠れず」と宇治煎茶の銘柄「上喜撰」と「蒸気船」をかけた狂歌が流行する。同年同月、木曾地方は日照り続きで馬籠もまた大変であった。江戸と馬籠の状況を重ねあわせながら、物語ははじまっていく。

馬籠は木曾十一宿のひとつ、美濃路の西側から木曾路に入った最初の宿場である。そこに本陣、問屋、年寄、伝馬役、定歩行役、水役、七里役などからなる百軒ばかりの家々と、六十軒ばかりの民家と寺や神社がそれぞれ家業を継いできた。本陣、問屋、庄屋など支配層の末端にとって徳川の時代はよき時代であった。

そんな時代の終わり頃、馬籠に芭蕉の句碑が建った。半蔵の父らが建てたのである。

送られつ送りつ果ては木曾の籾（あき）はせを

江戸文化最後の輝きであった。

半蔵は、当時の多くの若者の世間の遊びである魚釣り、碁、将棋などにふけるのではなく、その代わりに読書を選ぶ人だった。馬籠では、師を得られないままに『詩経』、『四書』、『易書』、『春秋』などを独学した。やがて馬籠の隣の中津川宿に友を得、そのついで医者をする宮川寛齋に師事、平田派の国学を学んだ。

近世、信濃地方で物資の輸送のために使用された馬とその輸送行為のことを中馬というが、当時の中津川はその中馬で栄えた宿場町であり、交通の要衝として物流と情報の拠点であった。尾張藩の東端に位置し、経済力とあいまって藩内でも独自の存在であった。

中津川では、幕末の対外的な危機に促され、安政六年以降、急速に平田門人が増加する。国際問題に直面することで、日本国の町人としての自己意識が、平田思想を受け入れられる素地となった。中津川は、全国的に見ても平田国学の重要な拠点であった。

中津川商人は、以前から、京都での平田門人の宿泊場所として中心的役割を果たしていた生糸問屋の池村久兵衛と、商売上深い関係にあった。そこへ同じ平田門下としての関係が加わり、池村に集まる情報は素早く中津川に届けられ、ここを経由して江戸の平田家に伝わる。このような有様を藤村はくりかえし述べている。そんな環境のなかで、半蔵は向学心を平田国学にぶつけた。

支配体制の末端を担うということは、村民の生活に直に

触れるということでもある。十代の後半、生活に迫られて木曾の御用林に入り伐採したことで、腰縄で取り調べられる山民の姿の触れることもあった。また、駄賃の上刎ねや荷送り状の書き換えなどで牛方を搾り取る悪徳問屋に対して、結束して闘い、ついに勝利した牛方の団結力にも強い衝撃を受ける。こうして封建支配の残酷さとそれを打ち破る力に触れ、半蔵は改革の志と「世直し」の理想を持ちはじめていく。

半蔵は江戸へ旅する機会を得る。そのとき、平田国学とともに学ぶ友人に手紙を送る。『夜明け前』第三章の一次のようにはじまっている。

「蜂谷君、近いうちに、自分は江戸から相州三浦方面へかけて出発する。妻の兄、妻籠本陣の寿平次と同行する。この旅は横須賀在の公郷村に遠い先祖の遺族を訪ねるためであるが、江戸をも見たい。自分は長いことこもり暮らした山の中を出て、初めての旅に上ろうとしている。」

こういう意味の手紙を半蔵は中津川にある親しい学友の蜂谷香蔵あてに書いた。「君によくこんでもらいたいことがある。自分はこの旅で、かねての平田入門の志を果たそうとしている。最近に自分は佐藤信淵の著書を手に入れて、あのすぐれた農学者が平田大人と同郷の人であることを知り、また、いかに大人の深い感化を受けた人であるかをも知った。本居、平田諸

大人の国学ほど世に誤解されているものはない。古代の人に見るようなあの直ぐな心は、もう一度この世に求められないものか。どうかして自分らはあの出発点に帰りたい。そこからもう一度この世を見直したい。」
という意味をも書き添えた。

こうした青年時代を送った半蔵は、三十二歳で父の吉左衛門から跡を継いだ。

王政復古

江戸では、安政五年（一八五八）の安政の大獄、万延元年（一八六〇）の桜田門外の変と激動が続く。京都からは、皇女和宮が徳川家茂に降嫁していった。公武合体の切り札としての政略結婚であった。公武合体とは、幕府と朝廷との融和・結合をはかることで倒幕勢力に対抗しようとする幕末の政治運動の一潮流である。

文久元年（一八六一）、輿入れの長い行列は馬籠を通り、木曾路を江戸へ下って行った。和宮は当初、東海道を下ることになっていた。しかし東海道では、この縁組に反対するものによる和宮奪回が起こる危険が高く、木曾路に模様替えとなった。村民たちは和宮の降嫁道中に沸き立った。旅籠としての馬籠の最後の華やぎであった。

幕府は文久二年（一八六二）、参勤交代を廃止、江戸表に留まってきた各藩の家人が国元へ帰る。馬籠もまたそれらの人々が続いた。

参勤交代は、幕府が中央集権制を確立し維持するために、一定期間諸大名を江戸に参勤させた制度であり、家光の時、寛永十二年の武家諸法度の改定によって制度化され、以来連続と続いてきた。

参勤交代は軍の移動であり、大名は配下の武士を大量に引き連れて江戸に出仕し、また領地に引きあげねばならなかった。それが大名行列である。参勤交代のために本陣や宿場が整備され、大名行列が消費する膨大な費用によって繁栄した。大量の大名の随員が地方と江戸を往来したために、彼らを媒介して江戸の文化が全国に広まった。その参勤交代もまた廃止されたのである。

この時期、最も明確な目的意識を持って行動したのが国学の徒である真木和泉であった。真木和泉(文化十年(一八一三)三月七日〜元治元年(一八六四)七月二十一日)は筑紫の国の神官の子に生まれ江戸に遊学する。後に筑紫に帰り藩の改革に取り組むがおよそ十年間にわたり蟄居を命じられた。この期間に全国の志士と交流し、またその思想を深めた。その後、紆余曲折を経て、文久三年(一八六三)五月長州へおもむき毛利敬親父子に謁見、攘夷親政、討幕を説き、六月上京し学習院御用掛となった。真木は、早くから倒幕と皇政復古の主張を明確に掲げ、一貫して行動、倒幕勤王の志士たちを指導した。『夜明け前』はいう。

弘化安政のころから早くも尊王攘夷の運動を起こして一代の風雲児と謳われた彼、あるいは堂上の公卿に

建築しあるいは長州人士を説き今度の京都出兵も多くその人の計画に出たと言わるる彼、この尊攘の鼓吹者は自ら引き起こした戦鬪の悲壮な空気の中に倒れて行った。彼は最後の二十一日まで踏みとどまろうとしたが、その時は山崎に退いた長州兵も散乱し、久坂、寺島、入江らの有力な同僚も皆戦死したあとで、天王山に走って、そこで自刃した。

実際、文久三年(一八六三)八月一八日、会津藩と薩摩藩が結託して長州藩を追放した政変が起こる。真木和泉も長州に逃れる。この時期の薩摩はまだ公武合体派であり、長州は明確に反幕府であった。そして、翌元治元年(一八六四)年六月、長州藩の出兵上洛にあたり、その委託を受けて真木和泉は諸隊総督となった。七月の禁門の変では久坂玄瑞、来島又兵衛らとともに浪士隊を率い、七月十九日堺町御門を目指して進軍、市街戦となった。このとき京の街には兵の死体が至る所に転がり、街々は炎上、大混乱に陥った。結局、福井藩兵などに阻まれて敗北、天王山に退却、真木和泉の率いた長州軍は、激戦場から二十日には山崎まで落ちのび、ここで従ってきた数十人を解散する。長州兵の撤退を見届け、山崎に留まった真木和泉以下十七人は、いずれも長州の人ではなかった。

天王山山腹にある宝積寺で一泊、二十一日天王山に登り、会津藩士と新撰組の二百名、見廻組の三百名の討伐軍を確認した。天王山の中腹に登り京都の見える場所で火を

放ち、尊皇攘夷のころろざし半ばで、同志十六人とともに自刃した。五十二歳であった。

なんと多くの人間が死んだことか。島崎藤村は真木和泉について哀惜をもって描いている。

同じ頃、水戸藩の過激派浪士らは尊王攘夷の旗を掲げ筑波山に挙兵した。元治元年（一八六四）、世にいう水戸天狗党の乱である。天狗党は、幕府軍と戦闘をまじえながら北へのがれ、大子で態勢を立直して、武田耕雲斎を首領にえらび、尊皇攘夷のため幕府軍とやむなく対戦した事情を朝廷に訴えようと、京都へむけ西上を開始した。元治元年十月末のことである。西上軍の総勢は千人余りであった。真冬の下野から上野をへて信濃に至る。同年十一月二十六日は馬籠に滞在した。本陣には武田耕雲斎らが宿泊し和歌を残している。さらに美濃をへて、深い雪の峠を越して越前に到着した。

この時彼らを待ち受けていたのは、水戸藩出身の徳川慶喜（禁裏守衛総督）が、朝廷の命をうけて西上軍を鎮圧するために出動したという報せだった。窮地に追い込まれた西上軍は金沢藩に降伏、ついで敦賀の鯉蔵に収容された。徳川幕府は西上軍の約三分の一を処刑するという苛酷な処置を行った。敦賀での処刑をまぬがれた約五百人の多くが農民身分であった。このように水戸藩尊皇攘派の運動には多数の農民が参加していた。

三河や尾張あたりから伝え聞いた「ええじゃないか」の

声は、とうとう半蔵のいる街道にも騒然と伝わってきた。

ええじゃないか、ええじゃないか

馬籠の宿場では、毎日のように謡の囃子に調子を合わせて、おもしろおかしく往来を踊り歩く村の人たちの声が起こった。

慶応三年の夏から三河で神符の降下を瑞祥として「ええじゃないか」の熱狂が始まった。この熱狂は三河から東西に広がり、関東、中国、四国地方に達した。特に東海地方では、大地震、津波、大雨が相次いで起き、安政五年にはコレラが流行した。そうした中で民衆は、農村にあった御蔭参りを基盤として、「ええじゃないか」のはやしをもった唄を高唱しながら集団で乱舞した。世の変革の兆しを感じつつ、重くのしかかる不安から世直しに熱狂した。

京都を舞台に煮えたぎるような日々が続く。藤村は半蔵が「思いがけない声」を京都の同門の士から聞いたことを、伝える。

彼はその声を京都にいる同門の人からも、名古屋にある有志からも、飯田方面の心あるものからも聞きつけた。

「王政の古に復することは、建武中興の昔に帰ることであってはならない。神武の創業にまで帰って行くことであらねばならない」

その声こそ彼が聞こうとして待ち侘びていたものだ。多くの国学者が夢みる古代復帰の夢がこんな風に

して実現される日の近づいたばかりでなく、あの本居翁が書き遺したのものにも暗示してある武家時代以前にまでこの復古を求める大勢が押し移りつつあるということは、おそらく討幕の急先鋒をもって任ずる長州の志士達ですら意外とするところであろうと彼には思われた。

慶応三年（一八六七）十月將軍慶喜は政権を朝廷に返上（大政奉還）した。大政奉還は主導権を慶喜側が握ろうとする公武合体派の最後の試みであった。このときの薩摩は西郷隆盛らのもと長州と和解、倒幕の同盟を結んでいた。そして、大政奉還を打ち破るべく、十二月、西郷隆盛は京都に武力を集結、朝廷を動かし王政復古の号令を敢行。こうして倒幕へ向けた闘いが開始された。「御一新」である。王政復古は鎌倉幕府以来の諸制度を廃止、武家の世を明確に否定した。『夜明け前』はいう。

踏みしめる草靴の先は雪溶けの道に燃えて、歩き回れば歩き回るほど新しいよるこびがわいた。一切の变革はむしろ今後にあるうけれど、ともかくも今一度、神武の創造へ―遠い古代の出発点へ―その建て直しの日が出て来たことを考えたばかりでも、半蔵らの目の前には、なんとなく雄大な気象が浮かんだ。

日ごろ忘れがたい先師の言葉として、篤胤の遺著『静の岩屋』の中に見つけて置いたものも、その時半

蔵の胸に浮かんで来た。

「一切は神の心であらうでござる。」

ここで『夜明け前』の一部が終わる。

維新の変質

だが、維新の現実には半蔵の夢を裏切っていく。半蔵は平田派国学の門人として王政復古の夢に生きようとするが、村民や宿場の人々を守らなければならず、友人達のように政治活動に身を投じることができなかった。それだけに御一新を待ち望む気持ちは強かった。

そこに赤報隊の悲劇である。

青山半蔵は新政府軍東征の先駆がくると聞いて胸躍らせる。相楽総三（さがらそうぞう）率いる赤報隊である。小説では「惣三」であるがここでは本来の名で書く。過ぐる慶応三年十月、江戸の薩摩藩邸に入った相楽総三は、集めた同志たちと共に江戸市中を攪乱する命を帯びる。これは、西郷吉之助、大久保一蔵、岩倉具視が立案したもので、江戸幕府を挑発し革命戦争に持ち込もうとするものであった。これに誘われた幕府は薩邸を焼き討ち、これが起因となり鳥羽・伏見の戦いが勃発した。一八六八年一月二日大坂から京都へ向かう幕府軍を官軍が鳥羽・伏見に迎え討つ。官軍完勝であった。これによって幕府側は朝敵の烙印を押され、大義名分が倒幕派のものとなった。兵庫に上陸し京に着いた相楽は手を取って涙を流して感謝し

たという。

その相良総三らは東山道官軍先鋒赤報隊として江戸へ向
け中山道を上る。「年貢半減令」の触れを出しながら進む
が、官軍の財政は厳しく、三井などの特権商人に金を借り
ることになる。商人は無条件で金を貸すことはなく、年貢
米の請負を要求し、勅定にある年貢米半減の撤回を条件に
した。岩倉らははじめから相楽らの行動に不満の色をなし
半減令撤回を求めていた。布告の撤回は、新政府の信用に
関わる問題であるから、年貢米半減を旗印にすでに進撃し
ている赤報隊を呼び戻そうとした。

聞き入れない相楽隊に対し「偽官軍」であるから召し取
るべし、との命が信州諸藩に下された。下諏訪に布陣して
いた相楽隊は隊長以下幹部連が総督府に弁明のため出向く
が捕縛され、一八六八年三月三日、斬刑に処せられた。総
三はまさに従容として死に就いた。二十九歳だった。

慶応四年―明治元年の一八六八年は戊辰の年であった。
新政府軍と、旧幕府および奥羽越列藩同盟軍との間で行わ
れた一連の戦争、いわゆる戊辰戦争は、このように、その
最初の段階で、新政府側の大きな方針転換のうえに、すす
んでいったのである。

『夜明け前』では後日談として、「一行の行動を偽官軍と
非難する回状が巡ったこと、軍用金を献じた地方の有志は
皆付近の藩から厳しい詰問を受けることになること、半蔵
も木曾福島のお役所に呼び出され、お叱りを受けたこと」

が語られる。ここで初めて彼が二十両もの大金を赤報隊に
提供したことが明らかになる。

半蔵が信じていた夜明け、馬籠の人々をはじめとする一
般の人々を解放するような夜明けは、来なかった。赤報隊
の悲劇は、明治維新が農民や多くの人民の望みを掲げて開
始されるが、新しい政権がうち立つや彼らを裏切り、政権
が大商家家とそして生まれつつある産業資本家のものに転
換していく画期であった。半蔵の夢はこうして最初の挫折
を味わう。

木曾地方は維新後設置された筑摩県に属した。県は木曾
山林に対する村民の入会権を認めなかった。半蔵は戸長ら
をまとめ県への嘆願書を作り、山林を村民の生活の場とし
ようと奔走する。しかしこの試みは、山林事件として責任
を問われ、戸長免職に追いこまれた。

半蔵は東京に行くことを決意する。そこで一から考え、
生き直すつもりだった。四十三歳のときである。てあって
神祇局の後身である教部省に出仕する。だが、そこでも、
かつて国の教部活動に尽くしたはずの平田国学の成果は
まったく無視され、同僚たちは国学者を冷笑するような始
末であった。維新直後の神祇局では、平田鉄胤をはじめと
する平田国学者が文教にも神社行政にも貢献し、新政府の
ために尽力したはずである。だが、それはすでに一掃され
てしまっていた。半蔵は自問する。

「これでも復古といえるのか―」

半蔵は半年勤めた教部省を辞す。

縁あつて半蔵は飛騨山中の水無神社の宮司になる。「古い神社の方へ行つて仕えられる日の来たことは、それを考えたばかりでも彼には夢のような気さえした。」

明治七年秋、半蔵は和歌一首を扇子にしたため、明治天皇の行幸の列に投げ入れる。その歌。

蟹の穴ふせぎとめずは高堤

やがてくゆべき時なからめや 半蔵

それでも一縷の望みをかけようとする苦しいところを詠んでいる。半蔵はこの扇子を、近づいて来る第一の御馬車の中に投げた。そして急ぎ引きさがつて、額を大地につけ、袴のままにそこにひざまずいた。すべてが終わつた。半蔵は「贖罪金」を支払い木曾に戻つた。

狂あるのみ

木曾への途上に馬籠に帰つた半蔵は、隠居を受け入れる決心をする。そして飛騨に入っていく。長く神仏習合の行われてきた飛騨の奥地、廃仏毀釈から間もないころの飛騨である。半蔵は、この地で古道を人々に伝えることが天命だと考えた。藤村は、宮司としての半蔵を、半蔵の生涯の親友で半蔵が馬籠に帰るのを待たずに死んだ伊之助の病床の言葉として語る。

なんでも飛騨の方から出て来た人の話には、今度の水無神社の宮司さまのなさるものは、それは弘大な御

説教で、この国の歴史のことや神さまのことを村の者に説いて聞かせるうちに、いつでもしまいに自分では泣いておしまいなさる。社殿の方で祝詞などをあげる時にも、泣いてお出なさることがある。村の若い衆などはまた、そんな宮司さまの顔を見ると、子供のように嘔き出したくなるそうだ。でも、あの半蔵さんのことを敬神の念につよい人だとは皆思ふらしいね。

そういう熱心で四年も神主を勤めたと考えて御覧な、とてもからだが続くもんじゃない。もうお帰りなさるがいい、お帰りなさるがいいーそりゃ平田門人というものはこれまでですでに為すべきことを為したのさ、この維新が来るまでにあの人達が心配したり奔走したりしたことだけでも沢山だ、誰が何と言つてもあの骨折が埋められる筈もないからナ

しかし、思いは大きくとも、なしたことは僅かであった。四年の後、再び馬籠に戻つた半蔵は、村の子弟の教育にあたらうとする。自分の二人の息子を東京に遊学させる。その下の息子こそ、島崎藤村その人である。藤村は書く。

「復古の道は絶えて、平田一門すでに破滅した。」

それを考えると、深い悲しみが彼の胸にわき上がる。古代の人に見るようなあの素直な心はもう一度この世に求められないものか、どうかして自分らはあの

出発点に帰りたい、もう一度この世を見直したいとは、篤胤没後の門人一同が願ひであつて、そこから国学者らの一切の運動ともなつたのであるが、過ぐる年月の間の種々な苦い経験は彼一個の失敗にとどまらないように見えて来た。いかなる維新も幻想を伴うものであるのか、物を極端に持つて行くことは維新の付き物であるのか、そのためにかえつて維新は成就しがたいのであるか、いずれとも彼には言つて見ることはできなかつたが、これまで国家のために功労も少なくなくかつた主要な人物の多くでさえ西南戦争を一期とする長い大争いの舞台の上で、あるいは傷つき、あるいは病み、あるいは自刃し、あるいは無慙な非命の最期を遂げた。思はず出るため息と共に、彼は身に徹えるような冷たい山の空気を胸いっぱい呼吸した。

このころまた木曾山をめぐる村民と県の争いが起こる。かつての経験をもとに半蔵も協力しようとするが、封建時代の末端にいた半蔵には、新たに争うものがよりどころとする「民有の権」が理解できない。半蔵の酒は深くなるばかりであつた。半蔵は酒を制限される。

そうしたある日、半蔵はついに狂う。明治十九年の春の彼岸がすぎたある夜、半蔵はふらふらと寺に行き、火をつけた。半蔵の放火は、神仏分離すらまっとうできなかつた明治維新の現実を、国学の徒であろうとしたものとして、許すことができないが故のことであつた。

こうして半蔵は長男に縄で縛られ、息子たちや村人が用意した座敷牢に入れられる。幽閉の日々である。わずかに古歌をしたためるひとときがあつたものの、狂気の人となつて没する。鉄道の時代がはじまつていた。青山半蔵は廃れゆく街道とともに生涯を閉じた。まだ五十六歳だった。

第二章 明治維新と国学

明治維新とは

この明治維新はいったいどのような変革であつたのか。結論をいえば、これは資本主義革命そのものであつた。それは、封建社会から近代資本主義社会への転換を実現するべく、新興の商業資本家とその利益を担う政治勢力が中心になつて、封建支配のもとで苦しんだ広範な社会層を決起させ、封建社会の支配権力を打倒し、資本主義社会に道を開く政治権力を打ち立てることである。その典型が一七九八年のフランス革命であつた。

これに対して「明治維新はフランス革命のようなブルジョア革命とはいえず、明治維新によつて成立した政権は絶対主義政権である」という説が日本の歴史学界では有力である。

この観点は、コミンテルンの「三二テーゼ」と、それに依拠した日本共産党およびいわゆる講座派のマルクス主義史学の立場から発している。こうした傾向を決定づけたの

が、山田盛太郎『日本資本主義分析』（一九三四）であった。絶対主義天皇制は半封建制の上に立っていて、半封建制は絶対主義の必要条件であるから、半封建制の解体とともに絶対主義天皇制も崩壊する、とするものである。

それはやがて日本戦後の近現代史学の有力な潮流となる。藤田省三も『天皇制国家の支配原理』（一九六六）で「明治維新の劃期的意義が絶対主義と民族主権国家を形成したてんにあることは、周知に属している。」と第一章を始めている。

これは歴史現象の複雑さに惑わされて本質を見失った、木を見て森を見ない論である。フランス革命を美化するあまり、民主主義が実現しなかったが故に、明治維新はフランスのような革命とは言えないとするのである。

フランス革命とて、一七八九年の革命以降、激烈な内部闘争を経てナポレオンがクーデターによって権力を確立、共和国八年の憲法で革命の幕を閉じる。待っていたのはナポレオンの軍事独裁である。人民の蜂起によって絶対主義王制の独裁者を倒した革命は、こうして新たな独裁者を作り出しているではないか。

維新の原動力

革命の主力となつて働いたのは封建制に反対する農民であり、貧農大衆である。江戸時代末期の百姓一揆や打ち壊しは実に激烈なものであった。

幕末期には、労働集約的な工場制手工業が発展し、農民層の内部に小作農からも没落した無産の労働者層を生み出し新たな対立が生まれていた。とくに安政年間の開港以後良質な銀貨の流出、絹糸などの産物の輸出などが引き起こした急激な物価変動は、農地をもたない農民層をいっそう窮乏させた。

彼らを主体とする経済的平等を求める世直し闘争が、幕末一揆の中心となった。さらに慶応期にいたって、幕府と長州の戦争、全国的な内乱状況は世直しを激化させた。慶応二年（一八六六）の江戸や大坂の打毀しは、百姓一揆と同時的に起き、速やかに伝播、動乱というべき段階に達していた。同年の武州一揆、奥州信達一揆、幕長交戦地の一揆などとあわせて、幕長戦争に苦戦する幕府権力に大きな打撃を与えた。この闘争は「ええじゃないか」の民衆運動とともに、江戸幕府滅亡の原動力となった。

そしてこの革命の政治を指揮したのは勃興した都市商人階層とその利益を担った下層武士団であった。都市の大商人たちが革命軍の財政を一手に引き受けていた。

都市大商人は徳川封建制を打倒するために勤労人民と農民を味方につけ、その旗には、はっきりと民主主義的自由の文字をかきしるした。明治維新の先鋒となった赤報隊は「年貢半減」の標語をもって行進し、貧農大衆の熱烈な歓迎を受けた。

だが、徳川封建制の崩壊が明確になり、討幕派の権力が

樹立されるやいなや、民主主義的自由の旗は投げ捨てられ、都市商人による独裁が実現された。赤報隊は「偽官軍」とされ、隊長相良総三は理由も告げられぬままに斬殺された。この背後には「相良を斬れ。そうしなければ金は出さない」という大商人たちの意向があった。

このように、明治維新は日本における資本主義革命そのものであった。封建制の内部に成熟した商品経済と貨幣経済、そして資本主義はもはや古い封建制を打破しなければ発展し得なかった。土地から切り離された「自由」な労働者を求めていた。彼ら都市の資本家たちは、封建制度のもので苦しめられていた、農民、下級武士、天皇のまわりの下級公卿と貴族、これらと連合し、この力で薩摩藩と長州藩などを連合させ、「倒幕・王政復古」を実現した。

この大号令が発せられた慶応三年（一八六七）十二月九日、十六歳の天皇の前で開かれた封建体制下の最後の会議は、すべて薩摩と長州の手によって準備されたものであり、しかもこの日には朝廷のまわりは倒幕軍の総司令官である西郷隆盛が指揮する大軍によってとりかこまれていた。西郷が発したあの有名な一言「短刀一本あればすべて済むことだ」というこの力が天皇の号令をひき出したのであった。

まさに、天皇の命令はすべて倒幕軍の力が出させたのであった。当時、幕府軍と倒幕軍の双方の間では「玉（ぎょく）、天皇のこと」をどちらがとるかが勝負だ」といわれて

いたのをみても、天皇をかついですべては革命軍がやったことであった。

明治維新の時代、西洋資本主義はすでに独占と帝国主義的な段階に到達していた。日本の資本家階級は大急ぎで日本資本主義の発展、強化、拡大をはからねばならなかった。産業政策から文教政策まで上から国家権力を最大限に動員して進めなければならなかった。富国強兵、文明開化、資本主義育成、学制発布、地租改正、秩禄処分を強行し、農民一揆、土族反乱、自由民権運動を弾圧した。

明治政府は、過酷な搾取と収奪に対する農民一揆が多発するなか、一八七二年（明治四年）に「えた」「非人」の名称を廃止し、身分と職業を平民同然とするとの布告である「身分解放令」を発する。同時に「新平民」等の官製差別用語まで作り差別をあり、労働者や農民の怒りをそらす人民支配の道具として部落差別を再編した。

明治維新後、日本国は玉たる天皇を帝国主義の旗印として前進し、いっきよに資本主義へ移行、日清戦争と日露戦争を経て帝国主義へと転化していった。明治維新にはじまる近代日本は、事実として、日本資本主義、日本財閥、独占資本の巨大な権力の支配する時代であった。

国学の基盤

多くの志士たちがよりどころとした思想は国学であった。国学はどのように形成され、変革主体の思想となっ

たか。

その基礎となるのが、日本にはじめて生まれた歴史書である『古事記』と『日本書紀』である。ユーラシア大陸や太平洋諸島に一定の広がりをもつ創世神話と、これに王権の究極の根拠は天上の神であるとする物語をあわせたものであり、そうすることでこの世の起源から天皇中心の王朝成立、およびその正統性の根拠を体系的に述べたものである。この二つの歴史書は、宗教的日本神話にもとづく大和朝廷の正統性の確認と、天皇は万世一系であることを宣言したものであった。

『続日本紀』の養老五年(七二〇)五月条に「日本紀を修す」とあるように『日本書紀』が養老年間に成立したことは確かである。それに対して『古事記』は本来に和銅年間に成立したのか平安初期に成立したのかなど議論がある。実際、『古事記』は長く公の場には現れなかった。

『古事記』を発見し、一君万民の皇国主義思想の原型をつくりあげた人こそ江戸時代中期の国学者、本居宣長(もとりのりなが、享保十五年く享和一年、一七三〇く一八〇一)であった。

現在の『古事記』という文書は、彼の『古事記伝』中に初めて出現した。宣長は『古事記』のなかに、原日本語を発見した。『古事記伝』は寛文三十五年の営みである。

神道は中世以来、仏教と習合し、仏が神の形をとって日本列島に現れたとする本地垂迹説が一般的になっていた。

本居宣長はこの仏教と神道の習合から、神そのものを改めて取り出した。そして、宣長は『古事記』を再発見し、そこに描かれた「神と日本」こそ固有の「日本」であるとしたのである。

近代の国家は「国民」を定義することを求める。「日本人」を定義すること、これが本居宣長の仕事である。そして宣長は「敷島の和心を人間はば朝日にはふ山ざくら花」を心とするものが「日本人」であり、日本人のクニが「日本」であると定義したのである。

十六世紀後半から十七世紀初頭にかけて全国を統一した織田信長、豊臣秀吉につづく徳川家康による江戸幕府は、天皇を擁して自らの権力と政治支配を確立した。幕府は朝廷に小大名なみの御料(領地)と公家領をあたえ、幕府の援助で祭司的行事と、天皇制は残した。しかし幕府は天皇が政治上の実権をもつことは許さず、朝廷を厳しい統制下に置いた。天皇は名目的な作曆、改元、叙位任官の祭司的役割を保持していたにすぎなかった。権力は封建領主としての武士、武家がにぎっていた。仏教寺院は宗門改めや宗門人別帳などによって百姓、人民の管理を行い、封建支配体制を補完していた。

本居宣長の時代はすでに生産力はいっそう高まり、商品経済、貨幣経済がすべての生活を支配するようになっていた。つまりは町人、商人が経済上の実権をにぎってきたということである。しかし政治上の実権は封建領主・武士階

級（当時は徳川幕府）がにぎっており、その幕府の政治思想は中国からきた儒教であり、そのなかでも、一国の政治支配の安定は階級制と位階勲等にもとづく秩序の維持にあるとする政治学を含む朱子学が支配していた。ここに経済上の実権者と政治上の実権者との矛盾が激化しつつあった。

このような新しい時代、歴史の要求にこたえて出てきた新しい思想こそ、一君万民の古代へ立ち返れ、という皇国主義思想であった。一七〇〇年代に本居宣長が説いたのは、日本国は神の国であり、神は天皇である。故に神たる天皇こそ唯一の統治者であり、その神の前では万民は平等であるということであった。これはまさに徳川封建制度に對する批判であり、反逆であった。一君万民思想は封建身分制度を内部から爆砕する。

本居宣長自身は江戸徳川の体制がまだ揺らいでいない時代に活動し、政治的配慮をこめて、「道をおこなふことは君とある人のつとめ也、物まなぶ者のわざにはあらず、もの学ぶ者は道を考へ尋ぬるぞつとめなりける」（『玉かつま』）と、自らの任務を真理の探究に限定し、「やすくののやすらげき世に生れ遇ひて安けてあれば物思ひもなし」（『百銚百首』）とする非政治的な人生観を公にしていた。

が、言葉から入って古代に仮託された人間を発見したことは、それ自身、封建体制を倒す方向へ人々をまとめていく力をもった。神たる天皇の前では万民は平等という思想は封建体制と両立し得ない。

篤胤の古道

平田国学こそ青山半蔵が生涯の思想としたものである。『夜明け前』は国学を次のようにいう。

あの賀茂真淵あたりまでは、まだそれでもおもに万葉を探ることであった。その遺志をついだ本居宣長が終生の事業として古事記を探るようになって、はじめて古代の全き貌を明るみへ持ち出すことが出来た。そこから、一つの精神が生れた。この精神は多くの夢想の人の胸に宿った。後の平岡篤胤、及び平田派諸門人が次第に実行を思う心は先ずそこに胚胎した。何と言つても「言葉」から歴史に入ったことは彼等の強味で、そこから彼等は懐古でなしに、復古ということをつかんで来た。彼等は健全な国民性を遠い古代に発見することによつて、その可能を信じた。それには先ずこの世の虚偽を排することから始めようとしたのも本居宣長であった。情をも撓めず慾をも厭わない生の肯定はこの先達が後から歩いて来るものに遺して置いて行つた宿題である。

平田篤胤（ひらたあつたね、安永五年〜天保十四年、一七七六〜一八四三）は、出羽国秋田佐竹藩の藩士の子として生まれた。幼少期に、浅見綱斎の流れを汲む中山青我に漢籍を学んだ。二〇歳のとき江戸に出て苦学し、二五歳のとき備中松山藩士平田篤穩の養子となって藩主板倉家に仕える。本居宣長の古事記伝のことを妻に教えられ、ここに

求めていたものとすると、古学に打ち込む。宣長に入門せんとするも宣長没により果たせず。三三歳のとき神祇伯白川家より神道教授、吉田家より学師の職を受ける。つまり、神道界はすべて平田篤胤の思想のもとに入った。没年に至るまで、該博の学殖をもって著述に従った。

篤胤は自らの学問を古道学(古学)ないしは皇国学と称した。古道とは、彼によれば、

古へ儒仏の道いまだ御国へ渡り来らざる以前の純粹なる古への意と古の言とを以て、天地の初めよりの事実をすなほに説考へ、その事実の上に真の道の具わつてある事を明らむる学問である故に、古道学と申すべし。こざる(『古道大意』上)。

宣長は、内にさまざまの思いを秘めてはいても、『古事記伝』はあくまで「事実としての古代」を明らかにするという態度で一貫していた。

それに対して平田篤胤は行動の人であった。その思想は、実践的意想的性格を強くもち、早くより大衆への講説を主要なる活動とした。また、一貫して儒教、仏教、神道諸派などはげしく闘った。

篤胤の時代、北方ロシアが幾たびとなく近海に現れ開国を迫った。また篤胤は、キリスト教や西洋文物にも深い関心と理解をもち、迫り来る対外的な危機を見通していた。

平田篤胤の膨大な著作の中で思想的な中心は『靈の真柱』である。この著作の目的を「大倭心を太く高く固めま

く欲するには、その靈の行方の安定することなも先なりける」と延べている。つまり西洋帝国主義の圧力をひしひしと感じつつ、この対外的危機に対する「国民」の思想主体の形成を目的としたのである。

そしてキリスト教的創世神話や旧約聖書を念頭に置きつつ、天御中主神を創造主とする一貫した神道神学を、記紀神話を再構成する『古史成文』『古史伝』の営為をもとに、造りあげようとする。

さらに平田篤胤は、天皇のもとにおける人民の平等を「御国の御民」としてのべていく。一君万民思想の展開であった。篤胤自身は幕藩体制それ自体を否定したのではない。ただ、古の人間に託して人間の生き方を提示した。

しかし、それは、江戸幕府を支えてきた儒教的、朱子学的世界観を一掃するものであるだけではなく、一君のもとにおける万民の平等という思想は、必然的にそれを抑圧する幕藩体制への批判を内包した。平田国学は一つの大きな政治的社会的力となった。篤胤は全国に四千人を越える弟子(死後の弟子を含め)をもち、その膨大なつながりは、幕藩体制にかわる世を求める運動の基盤となった。

第三章 あのス直な心

神とことわり

藤村は、青年期の半蔵には「古代の人に見るようなあの

直ぐな心」と言わせ、晩年の半蔵には「古代の人に見るようなあの素直な心」と言わせている。その心を改めて取り出したのが「本居、平田諸大人の国学」であった。

国学思想の柱にあるのは「神」である。その神とは何であるのか。神を日本語のことわりの中に聴きとり、それを語り出すことを試みよう。

言葉としての「カミ」は、タミル語 *kaṁi* に由来する。その意味は「大きな力をもつ恐ろしい存在」である。

この言葉が多く関連する言葉をともなつて、水田耕作技術とともに日本列島に伝わった。大野晋『一語の辞典』には次のようにある。

カミ(神)に当たる単語が古代のタミル語の中から見出される。

もし、それがカミ一つだけの共通というのならば、偶然の一致かもしれないという懸念があるだろう。ところが、カミに関わる日本人の行動を表わす単語、マツル(祭る)・ハラフ(祓ふ)・コフ(乞ふ)・ノム(叩頭する)・ホク(祝く、ことほく、寿のホク)・ウヤ(教)・アガム(崇む)、あるいは死に関するイム(忌む)・ハカ(墓)など、これらの宗教用語がセットとなつて、やはり平行的に共通する。また、豊作を祈願する年頭の行事の共通もある。またカミの類語と思われるヒ・ミ・チ・ムチなどについても共通する単語がある。

こうしてこれらの言葉、「神」とそれに関連する言葉がタミル語に由来することの根拠が示されてゆく。

このタミル由来の言葉「カミ」が、縄文語と混成し熟成する中で「カ」と「ミ」よりなるものとされていったと考えられる。「カ」は「アリカ」や「スミカ」の「カ」と同じく人の生きる場である。「ミ」は「ム」の名詞化であり、「ム」はそれを成り立たせている(むすぶ)ものである。

よつて「カミ」は人の生きる場を成り立たせているはたらきとなる。これが「カミ」の基層の意味である。

地鎮祭や氏神―氏子などにある考え方は、まさに場を結ぶものとしてのカミそのものである。

神のはたらきの内容をさらに掘り下げよう。

本居宣長の定義は次のようになる。

凡て迦微(かみ)とは、古の御典(みふみ)等にも見えたる天地の諸々の神たちを始めて、其の祀れる社に坐す御霊をも申し、又人はさらにも云わず、鳥獸木草のたぐい海山など、其の余(ほか)何にまれ、尋常(よのつね)ならずすぐれたる徳(こと)のありて、可畏き物を迦微とはいうなり(『古事記伝』一の巻)

「すぐれたること」のある「かしこきもの」を「かみ」というのである。「かしこき」とは、もののちからが、おそれるほどにおおきいことを意味し、そのものへの畏敬の念を表す。

では「かしこきもの」「もの」とは何か。世界のすべてはものである。ものほど深く大きいものはない。この世界はものからできている。森羅万象、すべてはものである。これが世界である。ものは存在し、たがいに響きあっている。これが事実である。世界はそれしかない。そのなかで、人もまたものとして、ものと豊かに交流しあい、語らいあう。ものは、いわゆる物質と精神と二つに分ける考え方で物質とは、まったく異なる。このような二分法ではない。ものは実に広く深い。この深く広いものを日本語は「もの」という一つの言葉でとらえる。この意義を吟味し、ここに蓄えられた先人の智慧に注目しよう。

ものは生きている。もの生きた働きを「いき」という。そして、もの生きる内容が「こと」なのである。ものはことにしたが、ことを内容として生成変転する。ものが生成変転する中味がことである。人はもの意味を聞きとり「こと」としてつかむ。人が、ものを、相互に関連する意味あるものあつまりとしてつかむとき、そのつかなだ内容を「こと」と言う。

また、そこからことよつてもものを定める。本居宣長は「すぐれたること」のある「もの」として神を定義した。「すぐれたること」の内容をいまま少し深めよう。

世界はいきいきと輝き運動を続けている。人もまたこの世界のなかでいつとき輝きそして生を終えてものにかえる。そのいつときを「いのちある」ときという。いのちあ

るとき、それを生きるという。

人の生きる場を結ぶもの、つまり「もの、いき、こと」といういのちをなりたせる働きそのもの、それが日本語の「神」である。この「いのちの不思議」に出会ったとき、それをなりたせるものとしての神のはたらきを「すぐれたること」として、実感する。

神は「かしこき」もの、恐ろしいものである。雷（カミナリ）はまさに神の「鳴り」であり、「成り」であり、怒れる神であった。そしてこの神に、「はらへ」によって穢れをのぞくことを祈り、「まつり」によって豊穰を祈る。

人は心に願うことがかなうように神に祈る。心から祈るとき「すぐれたること」のある神は、その願いをかなえる。

人が生きることとは、ものに思いをかけ、そのものこのことを考え、願いがかなうように神に祈り、人生を動かしていくことである。心から神に祈ること、これが「古代の人に見るようなあの素直な心」の基本の意味である。

いのちあるものとしての人は世界からものを受けとり生きる。それがはたらくということであり、その場でこそもつともいのちが響きあい輝く。人と人はことをわりあい力をあわせてはたらく。人は語らい協働することで人になる。心から人と語ること、これが「あの素直な心」のもうひとつの意味である。「素直な心」とは神と人、人と人の間のまことのあり方そのものなのである。

そして「ものに思いをかけ、そのものこのことを考える」

営みを「ことをわる」という。ことをわるという営みは、人にとって基本的なことであり、他の言葉においても、この構造がある。

英語「Inter-lect」の意味は「わり＝inter、こと＝lect」つまり日本語の順では「ことーわり」であり、それはまたギリシア語の「dia-logos」する働きでもある。「dia」は割ることであり、「logos」はまさに日本語の「こと」に対応している。「logos」は言葉の意味するとともに問題になっていることの真相を意味する。それが指示する内容が「こと」である。「dia-logos」は「対話」と訳されるが、その言葉の構造はこれまた「ことわり」と同じである。「ことわり」は源氏物語で多く用いられた。源氏物語は、はじめて日本語で深く人間を表現した。その表現された内容こそが「ことわり」であり、また、人が生きる場のあり方も「ことわり」としてとらえられる。「ことわり」は源氏物語を貫く基本的な考え方である。「ことをわる」とは、ことを間にして互いに「語りあう」ことでもある。ことに導かれて心のなかで語りあう、それが「考える」ということである。ここには、人間の心の普遍がある。

そして、「理（ことわり）の学」が philosophy の本来の意味である。中江兆民は、philosophy を「理学」と訳した。philosophy を日本語のなかでとらえ、訳そうとする意思が働いていた。福沢諭吉もまた言葉を『易経』から直接にとつて「窮理」と訳している。「ことわりを窮明する

学」としての「理学」こそ、philosophy の訳として日本語にうらづけられたものであった。「ことわりの学」として philosophy をとらえるなら、少なくとも江戸末から明治期に出会った西洋を、主体的に、言葉の内部からとらえることができる。このように、日本語によって裏付けられた言葉を訳語にあてることが、兆民や諭吉によっていったんはなされた。

しかし、明治政府は「理学」を捨て「哲学」を採用した。「当時フィロソフィーを哲学と定めた西周が、明治十年東京大学創設と同時に文学部に哲学の科目を設けるに及んで此言葉を採用せしめたことから確定語のようになった」（小川甫文「近代日本の哲学思潮」、理想社版『哲学講座』第三巻）。「哲学」は、近代の中国西学が philosophy の訳語として転用した「希哲学」を西周が採用し、さらにそれから西が造語したものである。そして「理学」は自然科学と数学の総称になったが、これは日本語の中からその意味が定まる用法ではなかった。

philosophy を日本語で受けとめた「ことわりの学」としての「理学」か、漢字造語の根なし草言葉「哲学」か、ここに近代日本の分岐点が象徴されている。われわれはいま、「ことわりの学」として philosophy をとらえ直すべき地点に立っている。

神道と天皇

明治維新は半蔵の夢を裏切った。明治政府は国学の徒の夢を裏切つて成立した。その一般的理由は、資本主義はその本性として、固有の文化を奪い、世界を平坦化するからである。資本主義にとつて「古代の人に見るようなあの素直な心」は金儲けに不用なものである。

同時に、歴史の出来事はつねに一般的な理由と、固有の理由をもつ。固有の理由は何であるのか。それを明らかにするために、まず神道とは何かを考えよう。

神道は、神の道である。つまり、神道とは何よりこのような、神との語りとその人の行いであり、そのゆえに「道」なのである。

働くものは、いのちのはたらきとして耕し、ものの世界から糧を受けとる。神道とはこの日々の生産活動の不思議への畏怖と、その生産に携わりつつ生きてきた先人の智慧であり、その実践に他ならない。この生きるかたちを「里のことわり」という。生産の不思議を聴きとり、語らい、畏怖をもつて祈ること、これが神道である。

個々の人間は、言葉を身につけることで、この智慧を受け継ぎ人間としての考える力を獲得し、そして成長する。成長の過程で身につけた言葉は、その人の考える力の土台である。神道とは、言葉に蓄えられてきた智慧を時代の求めに応じてとりだし、明らかにすることそのものである。

半蔵らは「古代の人に見るようなあの素直な心はもう一度この世に求められないものか」と考えてきた。が、それ

は実現しなかった。一君万民の国学思想は新しい世を作り出すことができなかった。

明治以降の政府は、江戸期には幕府によって抑えられていた天皇を、神に祭りあげて、近代資本主義への国民統合に活用し尽くした。神道もまた国家神道として再編成され、日本の帝国主義化のために最大限に活用された。

神道家もまた多くはこの明治国家の神道利用に手を貸した。明治政府は、一君のもとに万民の平等という形式をとりながら、実際は新興の資本家の政府であり、階級格差と差別の社会であった。

しかし、恨みをのんで狂死した半蔵のことを忘れてはならない。そのために、なぜこのようになったのかを明らかにしなければならぬ。

すでにみたように、この日本列島はもともと縄文文明が開けていた。そこに、タミル人から水田耕作技術がもたらされ、長く並存しながら弥生の農耕文明が熟成していった。さらに、漢が大陸を統一する前の動乱期に、揚子江下流域から呉や越の末裔の移住も続いた。秦と漢の統一国家の時代、東アジアは安定し、それぞれの地で文明と言葉が熟成していった。

さらにその上に、後漢が滅び再び動乱期となった大陸から、天皇家の祖先がやってきたのである。弥生時代末期から古墳時代の日本列島は戦乱の時代であった。この時代、東アジア全体が大動乱であった。中国大陸、朝鮮半島、日

本列島はこの大動乱の渦中にあつた。そのなかで日本列島を武力統一し、列島中央部を支配したのが今日の天皇家の祖先である。中国大陸や朝鮮半島から亡命するようにやってきたものもあつた。

強大な武力をもった外来のものが支配を広げていくにあつて用いた方法は「土着の習俗を取り込む」ということであつた。

彼らは、農業協働体とその維持発展のために行つてきたさまざまな習俗を取り込み、あたかも天皇家がそれを代表するかのようには振舞うことで支配の権威を打ち立てた。その典型は「みこともち」として天皇を位置づけることであつた。固有の言葉で語られることを神から受け取るものとしての天皇、である。そして新嘗祭である。当時の基幹の産業である農業の発展を願う人民の心を取り込むため、農業協働体のなかで行われてきた習俗を取り入れ、それを即位の礼と結びつけることで、天皇が即位するにあつた。正統性と権威づけを演じ、人々の生活の形が天皇家に由来するとしてきた。

天皇は神の言葉である「みこと（御言）」を聞くものであり、列島の習俗が天皇に源をもち、天皇が日本文化を体現するといふ、この虚構と、それにもとづく支配体制は、天武天皇と続く天平時代に完成する。日本書紀編纂の過程がこの支配のあり方が仕上がっていく過程でもあつた。天皇家を中心とする貴族社会が支配権を失つて以降も、そ

の時々々の支配者は、この虚構を支配のてこにするために、深くかつ本質的に活用してきた。それは、現在まで続いている。

幕末、時代の変革を求める人々は「古代の人に見るようなあの素直な心」を世に取り戻そうとした。江戸時代にあつては天皇家もまた徳川支配のもとにおかれ、権威は失墜していた。このゆえに、反徳川の感情は天皇の権威を回復しようとする実践と結びついた。これは理由のあることであつた。

しかし天皇が「古代の人に見るようなあの素直な心」を体現するというのは、作られた虚構であり、王政復古によつてその「心」が回復することはあり得なかつた。半蔵の夢がかなわなかつた固有の理由は、ここにある。それどころか逆に、反封建の運動は天皇という回路を経由して新しい支配体制のなかに取り込まれていった。そこに成立したのがいわゆる国家神道である。しかし、これは神道ではなく、その真逆のものである。

神道は、天皇家が日本列島弧にわたり来るよりはるかに前から今日まで営々と受けつがれ、また深く耕されてきた古人の智慧である。人は、天皇制の基礎となる虚構から自由にならなければ、固有の言葉に根ざした今日に生きる古人の智慧としての神道を、自らのものとすることはできない。

天皇もまた日本語とその神道のもとにある。それをふま

え、そのうえで、ここに生きるもののクニのあり方、つまりは「クニ柄」をどのようにしてゆくのか。これは大いに議論すべきことである。

諸神道の共生

日本語には日本語に結実した智慧としての神道があるように、朝鮮語にも朝鮮語に結実した智慧としての神道があり、琉球諸語にも琉球諸語の神道がある。世界のそれぞれの言葉に、それぞれの神道がある。

それぞれの神道は互いに認めあつて共生しなければならぬ。そのための智慧と実践が今日の課題である。固有性を深く耕し、固有性を突き抜けた生きた普遍をめざす。言葉のなかに蓄えられてきた智慧は、それが直接の生産を土台にする生きた智慧であるかぎり、十分に掘り起こされたならば必ず通じあえる。人はわかりあえる。

資本主義の文明が押しつけた疑似の普遍ではなく、固有性が解放された人の生き生きとした普遍は可能である。固有性が互いを認めあつて共存するところ(場)としての普遍は可能である。しかし、それを現実の世界で実現していくためには、膨大な努力の蓄積と、現実のちからが不可欠である。

これは日本語だけの課題ではない。それぞれの言葉を固有の言葉とするものが目的意識をもって言葉のなかに蓄えられてきた智慧を掘り起こし、現代に甦らせ、これからの

世の土台とする。これが必要である。

われわれが立ちかえるべきところは、半蔵の夢であった「あの率直な心」である。この心によって、ものを分けあい循環させながら万物が共生する世を生みだしてゆく。破壊のなから建設されるべきものは、固有性と普遍が統一された人の生きる場である。日本語を深く耕すことをとおして、神道の精神は復興するだろう。そして、たがいの神道を認めあう、その普遍の場を生みだしてゆく。

資本主義は、人を資源と見なす。そしてその資源からいかにさちを奪い取るのかということとその基本的な動機としてきた。交換過程は複雑化し、そこに貨幣が生まれ、貨幣が自己目的化する。これは結局のところ、さちをいかに効率よく集め奪うのかということである。そのことが経済活動とされた。

しかし、人間は資源ではない。人間そのものとして、まじめに働き、ものを大切にし、隣人同僚、生きとし生けるもの、たがいに助けあつて生きてゆく。ひとりひとりの力は個人のものではなく、互いのものである。それが人間というものだ。人であることを自覚した人のことを人間という。

そのとき経済は人間にとって目的ではない。あくまで方法であり手段である。協同の労働を通した人間としての尊厳ある生活の実現、これこそがめざさなければならぬことである。

経済が目的となったのはこの八百年のことである。近代資本主義において金儲けは至上の目的であった。しかし経済を至上原理とするこの八百年は、長い歴史のなかの人の世のあり方として、過渡的なものでしかない。これがゆきづまっている。歴史は転換を求めている。

今日の根本問題は、資本主義にかわる別の生産関係を生み出すかどうかということではない。経済は手段であり方法であるという立場から、これをのり越えるのである。言いかえれば、資本主義的生産関係を使いこなす人間とその組織、世のあり方、これを創造してゆくこと自体が、資本主義の終焉である。転換の方向を一言でいえば、経済原理の世から人間原理の世への転換である。

夢を正夢に

半蔵があのと見た夢は、いまこそ正夢とするときである。

半蔵と国学の徒の夢を裏切つて成立した近代日本は、遂にあの十五年戦争に至る。この戦争は日本の歴史において未曾有のことであった。南太平洋から東南アジア、東北アジア、中国大陸と朝鮮半島、いわば日本列島弧に住むものの祖先の地のすべてに兵を進めた。そして敗北した。

しかしその責任はとられることなく、明治革命ののちに成立した官僚制などの基礎組織はそのまま残り、戦後は一転、対米従属の政治となった。そして、アメリカの核戦略

の一環として、地震列島に原発をいくつも作ってきた。

二〇一一年三月十一日、日本の東北地方を巨大地震が襲った。それに続いて東京電力福島第一発電所が崩壊した。首都圏の電気をまかなうために、白川の関の向こう、福島にこの発電所はつくられていた。それが崩れた。それは、核惨事としか言いようのない事態をひきおこした。核力発電所の事故はこれまでもいくつか起こっていた。しかし、もたらず災害の規模と対応する政治の非人間性において、この核惨事は人類史上もつとも悲惨なものになった。

東京電力福島第一発電所の引きおこしたこの核惨事は、かつての十五年戦争の敗戦につぐ第二の敗北である。内的必然性を欠いたままの近代化と、そのゆえに生まれる無責任体制という、近代日本に内在する基本的な問題が、二つの敗戦に通底している。そしてそれはすでに『夜明け前』において、本質的には見通されていた。

しかし、近代日本の政治とその背後にある世界の資本主義が、拡大の限界という現実を前にして崩れはじめていく。平安時代末期も江戸時代末期も天変地異が相次いだ。それは、政治や経済や社会のあり方を根本から変えなければならぬという警告を、神が発したものといえる。安政の大地震から明治維新まで十三年だった。

このたびの巨大地震にもその声を聴くことができる。その声を聴きとることが叡智である。『夜明け前』の言葉を

今こそかみしめなければならない。

資本主義が終焉を迎え、経済第一の時代から、経済を手段として使いこなす人間の時代への転換が、世界史の現段階が求める一般的な課題となっている。その課題に、それぞれの神道はそれぞれの神道に応じた固有の内容で応え、その課題を担う人とその世を生みだしてゆかねばならない。

青山半蔵の夢見た「あの率直な心」こそ、いまこの課題を担う人の心である。その心をもつ人は、生活の場や働く場など、人と人が交わるすべての場で、なまじうることをなし、そして、それぞれの神道を認めあい共存する新たなところを生みだしてゆく。

それは、確かに世を動かす。この道をゆくしかない。そしてそれがまた半蔵の思いを現代に受け継ぐことである。過去を水に流すことはできない。

基本文献

『夜明け前』 島崎藤村 青空文庫図書

『古事記伝』 本居宣長 岩波文庫

『霊の真柱』 平田篤胤 岩波文庫

『仙境異聞』 平田篤胤 岩波文庫

『折口信夫全集』 第二十卷 神道宗教篇 中公文庫

『一語の辞典 神』 大野晋 三省堂

半蔵の夢見た古の人々の「あの素直な心」は、資本主義的近代人の心とはならなかった。しかしそれは、資本主義を越えてゆかねばならない今こそ、歴史の課題をになう人々の心として、豊かに甦える。島崎藤村が書き残してくれた半蔵の夢見た心は、われわれを深く導く。

人は人生にゆきづまったときに、風土の内に、ながくそこに生きてきた人々の息吹を感じ、そこから立ちあがる力を得る。風と土、深い樹木の奥、こけむした巖、木漏れ日のあたる場、そこに神の息吹を感得する。それは、それだけのところにおいて真実であり、それを互いに尊びあう。

人は生まれ、生き、そして死ぬ。このまったく単純な事実のなかに、かぎらない変転と輝きがある。人は、ある時代にある環境のもとに生まれ、そのなかで生き、考える。何かを受け継ぎ何かを伝える。人は歴史を積みあげなければならぬ。

- 『相楽総三とその同志』上下 長谷川伸 中公文庫
『日本の歴史 明治維新』井上清 中公文庫
『明治精神史』上下 色川大吉 講談社学術文庫
『資本主義の終焉と歴史の危機』水野和夫 集英社